

創造から新天新地へ—24 章でたどる神の救済史 序章

1. はじめに

- (1) 聖書の 66 巻をどう読むか。
- (2) 聖書は無秩序な物語の寄せ集めか、一つの大きな物語か。
- (3) 多くの人が、「神は何をしておられるのか」と感じている。
- (4) 本シリーズの目的は、「創造から新天新地へ」を 24 章でたどること。
- (5) このメッセージは、全シリーズの序章である。

2. アウトライン

- (1) 聖書 一神の救済史の記録
- (2) 旧約聖書一神の救済史の進展
- (3) 新約聖書一神の救済史の成就
- (4) 新天新地一神の救済史の完成

24 章でたどる神の救済史

4つのポイントを通して本シリーズの概略を解説する。

I. 聖書 一神の救済史の記録

1. 旧新約 66 巻の多様性と統一性

- ①約 40 人の著者、1500 年以上の歴史、しかし一貫したテーマ。
- ②真の著者は神である。
- ③人間の著者は、聖霊の守りの中で執筆した（靈感）。
- ④聖書は、点ではなく線で読まなければならない。

2. 主役は人間ではなく神ご自身

- ①神が創造し、契約を結び、救済の計画を進める。
- ②聖書が書かれた目的は、神の栄光である。
- ③人類の救いは、神の栄光の一部である。

II. 旧約聖書一神の救済史の進展

1. キリスト教の旧約聖書（39 巻）

- (1) 律法（5 巻）
- (2) 歴史書（12 巻）
- (3) 文学書（5 巻）

(4) 預言書 (17 卷)

2. ヘブル語聖書 (24 卷) (タナク)

(1) トーラー (律法：5 卷)

- ①創世記
- ②出エジプト記
- ③レビ記
- ④民数記
- ⑤申命記

(2) ネビイーム (預言者：8 卷)

前期預言者 (4 卷) (預言者の視点から歴史を神学的に解釈)

- ⑥ヨシュア記
- ⑦士師記
- ⑧サムエル記 (上下巻を合わせて 1 卷)
- ⑨列王記 (上下巻を合わせて 1 卷)

後期預言者 (4 卷) (説教書)

- ⑩イザヤ書
- ⑪エレミヤ書
- ⑫エゼキエル書
- ⑬12 小預言書 (1 巻にまとめられる)

(3) ケトゥビーム (諸書：11 卷)

- ⑭詩篇
- ⑮ヨブ記
- ⑯箴言
- ⑰ルツ記 (一家族の物語)
- ⑱雅歌
- ⑲伝道者の書
- ⑳哀歌 (文学的には「詩篇・祈り」と同じ性格を持つ)
- ㉑ダニエル書 (ダニエルは預言者ではない。黙示文学の形式)
- ㉒エステル記 (「預言的歴史」より「知恵的物語」の扱いを受ける)
- ㉓エズラ・ネヘミヤ記 (祭司や書記官の記録文書。1 巻にまとめられる)
- ㉔歴代誌 (契約の民としての再出発。上下巻を合わせて 1 卷)

3. ヘブル語聖書 3 区分の意義

(1) トーラー (律法) (5 巻)

- ①内容：創造、選び、出エジプト、契約
- ②意義：神の救済史の基盤

(2) ネビイーム (預言者) (8 巻)

- ①前期預言者：歴史書 (4 巻)
- ②後期預言者：説教書 (4 巻)
- ③意義：契約の適用と破棄、そして希望の預言

(3) ケトゥビーム (諸書) (11 巻)

- ①内容：詩篇、知恵文学、歴史の総括
- ②意義：信仰者の応答と共同体の希望

(4) まとめ

- ①タナク (TNK) 24 巻は歴代誌で終わる = 「未完の物語」。
- ②キリスト教正典 39 巻はマラキ書で終わり、新約につながる。
- ③ルカ 24：44

Luk 24:44 そしてイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたと一緒にいたころ、あなたがたに話したことばはこうです。わたしについて、モーセの律法と預言者たちの書と詩篇に書いてあることは、すべて成就しなければなりません。」

4. タナク (TNK) から選ぶ 12 章

(1) トーラー (律法) から 5 章

- ①モーセ五書はイスラエルの信仰の根幹。
- ②契約共同体の誕生を示す。
- ③神の啓示 (創造、選び、契約、律法) が神の救済史の「基礎」。
 - * 創 1 章 — 創造と秩序
 - * 創 3 章 — 墮落と救いの約束
 - * 創 12 章 — アブラハム契約
 - * 出 12 章 — 過越し
 - * 出 20 章 — シナイ契約

(2) ネビイーム (預言者) から 5 章

- ①前期預言者 (ヨシ〜列) = 歴史書。
 - * イスラエルが律法をどう生きたかを「神学的歴史」として解釈。

* ヨシ 1 章 — 約束の地

* 2 サム 7 章 — ダビデ契約

* 2 列 25 章 — 捕囚

②後期預言者（イザ・エレ・エゼ・12 小預言書）＝説教書。

* 民の不従順と神の裁き、そして将来の希望を語る。

* 契約に従えば祝福、背けば裁き、という申命記的歴史観を実証する。

* イザ 53 章 — 苦難の僕

* エレ 31 章—新しい契約

(3) ケトゥビーム（諸書）

①内容：信仰共同体の応答

* 詩篇、知恵文学（箴、ヨブ、伝）。

* 黙示的文書（ダニ）、歴史総括（歴）。

②イスラエルの歩みを「補完・反省・希望」の視点でまとめている。

* ダニ 7 章 — 人の子の支配

* 2 歴 36 章 — 帰還の希望

(4) まとめ

①トーラー＝神の物語の基盤（律法と契約）

②ネビイーム＝歴史の展開と契約の適用

③ケトゥビーム＝信仰共同体の応答と将来の希望

III. 新約一神の救済史の成就

1. メシアによる契約の成就

(1) 系図に示される契約の連続（マタ 1 章）。

2. 十字架と復活

(1) イザ 53 章の苦難の僕の成就。

3. 教会の誕生と聖霊の働き（使 2 章）。

(1) 神の物語は、私たちをも含む物語として続いている。

IV. 新天新地一神の救済史の完成

1. 黙 21 章＝創 1 章の完成形

(1) 最初の創造 → 新しい創造

(2) エデンの園 → 神の都

2. 新約聖書からも 12 章を選択する。
 - (1) 神の救済史が完成する時が近い。
 - (2) 私たちも、この物語の登場人物である。

結論：今日の信者への適用

1. 点ではなく線で聖書を読む。
 - (1) 断片的な教訓集としてではなく、「創造から新天新地への物語」として読む。
 - (2) 文脈を考えながら読む習慣を養う。
 - (3) ディボーションにおいてそれを実行する。
2. 自分の人生を神の救済史の中に位置づける。
 - (1) あなたの人生は偶然の連続ではない。
 - (2) 神の救済史の一部としてデザインされている。
 - (3) 過去の出来事もその中に含まれている。
3. 終末の希望に生きる。
 - (1) 世界が混乱しても、救済史の終わりは「新天新地」である。
 - (2) 信仰者はこの終末の希望に生きる。
4. 共同体として歩むことを意識する。
 - (1) 救済史の物語は個人だけでなく、教会全体が担うストーリー。
 - (2) 自立と共生の視点を持つ。

創造から新天新地へ—24 章でたどる神の救済史

1 章 「世界の始まり」

創世記 1 章

1. はじめに

(1) 前回（序章）のアウトライン

- ①聖書 一神の救済史の記録
- ②旧約聖書一神の救済史の進展
- ③新約聖書一神の救済史の成就
- ④新天新地一神の救済史の完成

(2) 今回は「世界の始まり」について考える。

①創 1：1

Gen 1:1 はじめに神が天と地を創造された。

- ②この聖句をどう受け止めるかで、私たちの人生観・世界観・歴史観が決まる。
- ③もし宇宙が偶然の産物であれば、私たちの存在も偶然の産物である。
- ④もし人格を持つ創造主が存在するなら、私たちの存在には明確な目的がある。
- ⑤「私は何者なのか」
- ⑥創 1 章から「救済史の始まり」としての創造を学ぶ。

私たちは、豊かな人生を生きるように造られている。

創世記 1 章で啓示された 4 つの真理を理解すると、そのことが分かる。

I. 神は無から世界を創造された（1 節）。

1. 「初めに」ということば

- (1)「初めに」とは時間の始まりを意味する。
- (2) 時間は永遠の神によって「創造されたもの」である。
- (3) 神は時間の制約の外におられる。

2. 「神」ということば

- (1) 「神」とはヘブル語で「エロヒム」である。
- (2) 複数形であり、威厳・全能を表す。
- (3) 三位一体の神を暗示するとも解釈できる。

3. 「創造された」ということば

- (1)「バーラー」 は、神のみが主体となる動詞である。
- (2) 無から有を生み出す行為を指す。

- (3) 哲学や科学では「無から有は生じない」と言われる。
- (4) 聖書は「神のことばによってすべてが存在するようになった」と教える。
- (5) 救済史は神の主体的な働きから始まる。
- (6) 創造は、時・空間・物質の起点である。
- (7) 神は自然の法則の上におられ、自然を支配されるお方である。

4. 適用：私たちの存在は偶然の産物ではなく、神の御心と計画の中にある。

- (1) 真のアイデンティティは、神との関係の中にある。

II. 人は、神のかたちに造られた（26～27 節）。

1. 26 節

Gen 1:26 神は仰せられた。「さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう。こうして彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地の上を這うすべてのものを支配するようにしよう。」

2. 「神のかたち」とは、肉体的形状ではない。

- (1) それは、霊性・理性・道徳性・関係性を持つ存在であることを意味する。
- (2) 人は被造物の頂点として造られた。
- (3) 人には、他の被造物に対する管理責任が与えられた。

3. 「かたち」の目的は、神の国の支配に関わる。

- (1) 創造の目的は、神の国の樹立である。
- (2) 男女としての創造は、創造の秩序の一部である。

4. 人は「神の似姿」として尊厳を持ち、いのちは聖なるものとされる。

- (1) いのちの価値は、行いではなく、神に似せて造られたことにある。

5. 適用：自己否定に陥るとき、「神のかたちに造られた」という事実に戻り立つ。

- (1) 他者に対する尊重もこの事実に基づく。

III. 神は造られた世界を「良い」と宣言された（31 節）。

1. 31 節

Gen 1:31 神はご自分が造ったすべてのものを見られた。見よ、それは非常に良かった。夕があり、朝があった。第六日。

2. 創造の各日ごとに「神は見て、それを良しとされた」と繰り返される。

- (1) 「良い」とは機能的完全性、調和、神の意図どおりであることを意味する。
- (2) 世界は初めから墮落していたのではなく、「非常に良い」状態で始まった。
- (3) 後に罪が入り、死と破壊がもたらされるが、神の最初の御心は祝福と調和に満ちていた。

3. 適用：現代の世界には苦しみや不条理があるが、それに打ち勝つ秘訣がある。

- (1) 神の創造は本来「良い」ものであったことを知る。
- (2) やがて来る「新天新地」への希望を確認する。

IV. 天地創造の目的は、神の国の臣民を造り出すことにあった。

1. 最初に創造されたのが、天使たちである。

- (1) 天使は霊的存在であり、知性を有する（マタ 22：30、ヘブ 1：13～14）。
- (2) コミュニケーション能力が与えられている。
- (3) 天に住むように創造されたが、地に下ることも許された。
- (4) 天使たちの間には、権威や能力に関する序列が存在する。
- (5) 天使の数についての明確な啓示はないが、ヒントになる聖句はある。
 - ①ダニ 7：10 幾千、幾万
 - ②ヘブ 12：22 無数
 - ③黙 5：11 万の数万倍、千の数千倍

2. 次に、神の国の臣民として創造されたのが、人間である。

- (1) 神の代理人としての役割が与えられた。
 - ①時代劇によく登場する役職に、「代官」というものがある。
 - ②代官とは、主君（領主）の代理人として領地に派遣され、その地の管理事務を司る者のことである。
 - ③代官には、主君に対する説明責任がある。
- (2) 神が人間を創造したのは、地球に代理人を置き、管理させるため。
 - ①当然のことながら、人間には神への説明責任が伴う。
 - ②神が代理人を通して地上を管理する統治形態を、神政政治と呼ぶ。
- (3) 重要な聖句
 - ①創 2：7

Gen 2:7 神である【主】は、その大地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。

* 地上の体が与えられたのは、領地をより良く理解するためである。

- ②創 1：26～27

Gen 1:26 神は仰せられた。「さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう。こうして彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地の上を這うすべてのものを支配するようにしよう。」

Gen 1:27 神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。

* 「神のかたち」に創造されたのは神とのコミュニケーションのため。

3. 適用：人間の創造によって、神の国を設立するための神の御業は完了した。

(1) 人生の目的は、神の国設立という壮大な計画に参加することである。

今日の信者への適用

1. 創造の事実は、私たちに「人生の意味」を与える。

(1) 私たちは偶然の産物ではない。

(2) 私たちは神の意図の中に生かされている。

2. 人の尊厳は、神のかたちに造られたことに基づく。

(1) それゆえ、自分を卑しめることも、他者を軽んじることも、誤りである。

3. 被造物世界の価値は、神が「良い」と宣言されたことに基づく。

(1) それゆえ、自然環境の管理や倫理的生活は信仰表現である。

4. 創造の神は、墮落した世界を救うために御子イエス・キリストを遣わされた。

(1) 救済史は創造から始まり、贖いへ、そして新天新地へと進む。

(2) 私たちはその大きな物語の中に生かされている。

創造から新天新地へー24 章でたどる神の救済史

2 章 「人類の堕落と救い主の約束」

創世記 3 章

1. はじめに

(1) 序章のアウトライン

- ①聖書 一神の救済史の記録
- ②旧約聖書一神の救済史の進展
- ③新約聖書一神の救済史の成就
- ④新天新地一神の救済史の完成

(2) 1 章では「世界の始まり」について考えた。

- ①天地創造の目的は、神の国の臣民を造り出すことにあった。
- ②創 1：1 をどう受け止めるかで、私たちの人生観・世界観・歴史観が決まる。

(3) 2 章では「人類の堕落と救い主の約束」について考える。

- ①創 3 章に入ると、突然雰囲気が一変する。
- ②ここから人類の歴史に「罪」が入り込む。
- ③「堕落の物語」は、歴史的事実である。
- ④世界に死、苦しみ、破壊が存在する理由がここにある。

この世に悪や悲劇が存在するのはなぜか。

創世記 3 章に示された物語を 3 区分して学ぶと、その理由が分かる。

I. 堕落の過程（1～6 節）

1. 創 3：1

Gen 3:1 さて蛇は、神である【主】が造られた野の生き物のうちで、ほかのどれよりも賢かった。蛇は女に言った。「園の木のどれからも食べてはならないと、神は本当に言われたのですか。」

(1) サタンは「蛇」を通して女に語りかける。

- ①サタンは「神の国」に対抗する「悪魔の国」の設立を企んでいる。

2. サタンの誘惑のステップ

- (1) 神のことばを曖昧に解釈する。
- (2) 神のことばを全面的に否定する。
- (3) 神への反抗は良い結果をもたらすと嘘を言う。

3. サタンは、神のようになりたいと思ったために墮落した。

- (1) 人間もまた、同じ理由で墮落した。
- (2) エバは欺かれたが、アダムは、十分な知識を持っていながら罪を犯した。
- (3) 二人は、無垢な性質（神を慕い求めるという性質）を失った。

4. 適用

- (1) 罪は「神のことばの歪曲 → 欲望の刺激 → 意志の選択 → 行為」と進む。
- (2) 私たちも日々「神のことばに立つか、誘惑に従うか」の選択に直面。

II. 墮落の結果：死と断絶（7～19 節）

1. 腰の覆いを作って生殖器を隠した。

- (1) 人間のいのちの源が罪によって汚されたことを示している。

2. 神が園を歩まれると、彼らは身を隠した。

- (1) 罪は「恐れ」と「隠れ」を生む。

3. 言い訳と責任転嫁が生まれた。

- (1) アダムは妻を、妻は蛇を責めた。
 - ① 罪は「関係の断絶」を生む。

4. 神は蛇を呪い、女には痛み、男には労苦を与えた。

- (1) 罪は「死と労苦の世界」をもたらした。

5. 適用：私たちの世界にある苦しみの根源は「罪」にある。

- (1) その問題は、人間の力では解決できない。

III. 救い主の約束：女の子孫

1. 最初の契約（エデン契約）は破棄され、別の契約（アダム契約）が結ばれる。

- (1) アダムは人類の代表としてこの契約を結んでいる。
 - ① この契約の条項は私たちにも適用される。

2. アダム契約は、4つの部分から成っている。

- (1) 蛇に対して呪いが宣言された。
 - ① 蛇はサタンに悪用されたので、動物界全体の中で一番呪われた。
- (2) サタンに対して裁きが宣言された（原福音）。

Gen 3:15 わたしは敵意を、おまえと女の間、／おまえの子孫と女の子孫の間に置く。
／彼はおまえの頭を打ち、／おまえは彼のかかとを打つ。」

- ①サタンと女の間で敵意が置かれる。救い主が女から誕生するから。
- ②「サタンの子孫」（反キリスト）と「女の子孫」（キリスト）の葛藤。
 - * 「彼はおまえの頭を打ち、おまえは彼のかかとを打つ」
 - * 十字架の死と復活の預言
- ③女の子孫の系譜は創 4 章から 5 章、そしてアブラハム契約へとつながる。

(3) 女に対して裁きが宣言された。

- ①「わたしは、あなたの苦しみとうめきを大いに増す」
 - * これは命令ではなく、そうなるという宣言である。
- ②墮落以降、夫に反抗し、夫を支配したいと思うようになる。

(4) 男に対して裁きが宣言された。

- ①土地はのろわれ、労働が苦役となる。
- ②肉体的な死が人の生活の中に入り込む。

3. 皮の衣

- (1) 神は、アダムと妻のために皮の衣を作り、それを彼らに着せた。
 - ①この時に殺された動物は、血の犠牲の最初のものである。
- (2) 皮の衣は、いくつかの霊的教訓を教えている。
 - ①神に近づくためには、神ご自身が用意された衣を着る必要がある。
 - ②その衣は、血の犠牲によって得られるものである。
 - ③アダムとエバは、エデンの園から追放される前にこの衣を着せられた。
- (3) 「いのちの木」から取って食べれば、罪を持ったまま永遠に生き続ける。
 - ①その悲惨な状況を避けるために、神は彼らを園から追放される。
 - ②入り口には、ケルビムと「輪を描いて回る炎の剣」（シャカイナ・グローリー）が置かれた。
 - ③この状態は、洪水によってエデンの園が破壊されるまで続く。

4. 適用

- (1) 「義の衣」は、主イエスのいのちの犠牲によって作られた。
- (2) クリスマンになるとは、アダムとのつながりを断ち、信仰によって主イエスとつながることである。
- (3) 主イエスから義の衣を受け取った私たちは、本当に幸いである。

結論：今日の信者への適用

1. みことばの真理の上に人生を築くこと

- (1) 霊的戦いは、解釈学の戦いである。
- (2) 誘惑の始まりは、みことばへの疑いである。

2. 神の国建設への貢献を意識しながら生きること

- (1) 霊的戦いの現実の中で、キリストの勝利に立つ。
- (2) 試練の中にも神の救済計画を読み取ること

3. キリストの義を衣として着る信仰に生きること

- (1) 墮落の場においてすでに救い主が約束された。
- (2) 神の恵みはいつも罪と破壊を上回る。

創造から新天新地へー24 章でたどる神の救済史

3 章 「アブラハムの選び」

創世記 12 章

1. はじめに

- (1) 1 章では創 1 章を取り上げ、「世界の始まり」について考えた。
 - ①天地創造の目的は、神の国の臣民を造り出すことにあった。
 - ②創 1：1 をどう受け止めるかで、私たちの人生観・世界観・歴史観が決まる。

- (2) 2 章では創 3 章を取り上げ、「人類の堕落と救い主の約束」について考えた。
 - ①「堕落の物語」は、歴史的事実である。
 - ②世界に死、苦しみ、破壊が存在する理由がここにある。
 - ③悪魔は、悪魔の国を作ろうとしている。
 - ④神は、救い主の約束を与えた。

- (3) 創 4 章～11 章の主要な出来事
 - ①カインによるアベル殺害
 - ②レメクの暴力の誇示
 - ③全地に満ちた堕落とノアの洪水
 - ④ノアを通した契約と再出発の恵み
 - ⑤バベルの塔による人間中心の文明
 - ⑥罪が個人から家庭へ、社会へ、文明へと広がっていく過程

- (4) 神の救済計画は、一人の人の選びから始まる。
 - ①無名の偶像礼拝者が召される。
 - ②その名はアブラムである。
 - ③彼の選びは救済史を完成させるための選びである。

- (5) 救済史の転換点としての創世記 12 章
 - ①創 12 章は、単なる一家庭の物語ではない。
 - ②ここで歴史は転換する。
 - ③普遍史（全人類の堕落史）から 救済史（選ばれた系譜の歴史）へ。
 - ④アダム → ノア → バベルまでは「人類全体」。
 - ⑤アブラハム以降は「選ばれた系譜」。
 - ⑥「選び」は排除ではなく、全世界を祝福するための手段である。

創世記 12 章には歴史を導く原則が記されている。

アブラハム契約の 3 つの特徴を理解すればそれが分かる。

I. 無条件契約

1. 創 12 : 1～3

Gen 12:1 【主】はアブラムに言われた。／「あなたは、あなたの土地、／あなたの親族、あなたの父の家を離れて、／わたしが示す地へ行きなさい。

Gen 12:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、／あなたを祝福し、／あなたの名を大いなるものとする。／あなたは祝福となりなさい。

Gen 12:3 わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、／あなたを呪う者をのろう。／地のすべての部族は、／あなたによって祝福される。」

(1) 聖書全体の背骨となるアブラハム契約の原型

2. シナイ契約のような条件付き契約ではなく、無条件契約である。

(1) ここに、救済史の出発点における「恵みの主導性」がある。

①神が主導権を握っておられる。

(2) 「行きなさい」とは、契約を受け入れる行為である。

①無条件契約を受け入れるという意思表示である。

(3) この契約は、人間の側の不履行によって破棄されることはない。

①イスラエルの民は不信仰に陥ったが、この契約は破棄されなかった。

3. 創世記 12 章 1 節の中心命令

(1) 「あなたは…行きなさい。」

①これは単なる移住命令ではない。

(2) アブラムは、見えない約束に人生を委ねる選択をした。

①安定した文化圏からの分離

②親族の保護からの分離

③確立した宗教的世界からの分離

(3) ヘブ 11 : 8

Heb 11:8 信仰によって、アブラハムは相続財産として受け取るべき地に出て行くようにと召しを受けたときに、それに従い、どこに行くのかを知らずに出て行きました。

①信仰とは、理解してから従うことではなく、約束に信頼して従うこと。

II. 祝福の三重構造

1. 個人への祝福

- (1) 「あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。」
- (2) 単なる名声ではない。
- (3) 神の救済計画の中で意味ある存在とされるという約束ある。

2. 民族への祝福

- (1) 「あなたを大いなる国民とする。」
 - ①ここで初めて、イスラエル民族の誕生が預言される。
- (2) アブラハムは個人の信仰者であると同時に、民族の父となる人物である。

3. 全世界への祝福

- (1) 「地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」
 - ①これは単なる普遍的幸福の約束ではない。
 - ②キリストにおいて成就する「メシア的約束」（ガラ 3：16）である。
- (2) アブラハム契約の祝福は、個人から外側に広がっていく構造になっている。

III. 「土地」の約束 — 救済史の転換点

1. アブラムへの約束の中心に「地」がある。

- (1) 「わたしが示す地へ行きなさい。」
 - ①この土地は、単なる生活圏ではない。
 - ②神の救済計画が展開される「歴史的・神学的な舞台」である。

(2) 土地の約束の展開

- ①創 15 章で「エジプトの川からユーフラテス川まで」。
- ②創 17 章で「カナンの全土は永遠の所有」。

- (3) イスラエルの地は、救済史の中で「代替不能な地」として選ばれている。

結論：今日の信者への適用

1. 約束を根拠に従う信仰

- (1) 「理解してから従う」のではなく、「約束に依拠して従う」。
- (2) アブラハムは、行き先を知らずに出て行った（ヘブ 11：8）。
- (3) 神は、価値観・習慣・過去の自分からの出発を求めておられる。

- (4) 私たちにとっての最大の安定は、状況ではなく「神の約束」に根ざすこと。

2. 祝福を他者に流す使命

- (1) アブラハムは「祝福の通り道」として召された。
- (2) 選びは特権の独占ではなく、他者を祝福するための召命である。
- (3) クリスマスは「祝福の受け手」であると同時に「祝福の配達人」。
- (4) 家族、職場、地域社会において、「祝福の香り」（2 コリ 2：15）となる。

3. 世の価値観からの分離

- (1) アブラハムは分離の命令を受けた。
- (2) 分離は隠遁ではなく、「価値観の分離」を意味する。
- (3) 信者は、世にありながら世に属さない（ヨハ 17：14～16）。

4. 契約に忠実な神への信頼

- (1) アブラハム契約は、現在も神の救済史の枠組みとして機能している。
- (2) 教会時代にあっても、神の計画はイスラエルを中心に展開されている。
- (3) イスラエルの再興は、聖書の約束の成就であり、信者の信仰を励ます。
- (4) 終末に向かって確実に進行する救済史の流れを意識した生活が重要。

創造から新天新地へー24 章でたどる神の救済史

4 章 「イスラエル民族の始まり」

出エジプト記 12 章

1. はじめに

(1) 1 章では「世界の始まり」を取り上げた。

①天地創造の目的は、神の国の臣民を造り出すことにあった。

(2) 2 章では「人類の堕落と救い主の約束」を取り上げた。

①悪魔は、悪魔の国を作ろうとしている。

②神は、救い主の約束を与えた。

(3) 3 章では「アブラハムの選び」を取り上げた。

①罪が個人から家庭へ、社会へ、文明へと広がった。

②救済史は、一人の人の選びから始まった。

③歴史の記述法が変化した。

* 普遍史（全人類の堕落史）

* 救済史（選ばれた系譜の歴史）

④約束の受け手（民）と「舞台」（地）が定められた。

2. 4 章の内容

(1) 4 章では「イスラエル民族の始まり」を取り上げる。

①ヤコブの一家はエジプトに下る。

②これは裁きであると同時に祝福でもある。

* カナン人の文化との同化

* 民族形成のための保護と増殖

③旧約神学の「懲らしめ＝救いの手段」が明確になる。

④ヤコブの子孫たちはエジプトで一大民族となり、そこを脱出する。

(2) 旧約最大の救いの出来事は、イエスの十字架を指し示している。

出エジプトの出来事は、イエスの十字架を指し示している。

出エジプト記 12 章にある 4 つの型を発見すればそれが分かる。

I. 過越の子羊 — メシアの子型

1. 出 12：5

Exo 12:5 あなたがたの羊は、傷のない一歳の雄でなければならない。それを子羊かやぎのうちから取らなければならない。

(1) 傷のない子羊

- ①無垢な犠牲
- ②イエスは罪のない方（1 ペテ 1：19）

(2) 子羊の直接的予表

- ①「神の子羊」キリスト（ヨハ 1：29）

2. 出 12：3

Exo 12:3 イスラエルの全会衆に次のように告げよ。／この月の十日に、それぞれが一族ごとに羊を、すなわち家ごとに羊を用意しなさい。

(1) 家族ごとに犠牲が適用される。

- ①個人的信仰の応答が必要。
- ②行いではなく「血」による救いを示す。

3. 出 12：46

Exo 12:46 これは一つの家の中で食べなければならない。あなたは家の外にその肉の一切れでも持ち出してはならない。また、その骨を折ってはならない。

(1) 骨を折ってはならない

- ①規定（出 12：46）→ メシア預言（詩 34：20）→ 成就（ヨハ 19：33）

II. 子羊の血 — 救いの方法

1. 出 12：13

Exo 12:13 その血は、あなたがたがいる家の上で、あなたがたのためにしるしとなる。わたしはその血を見て、あなたがたのところを過ぎ越す。わたしがエジプトの地を打つとき、滅ぼす者のわざわいは、あなたがたには起こらない。

(1) 血に救いの力があるのではなく、信仰に力がある。

- ①血は家の外側に塗られる。
- ②見えるしるしとしての信仰告白である。

(2) 神は、血を塗った者の上を過ぎ越す。

- ①救いとは「神の怒り」からの解放である。
- ②イエスは怒りを身に受けてくださった（イザ 53：5）。

Isa 53:5 しかし、彼は私たちの背きのために刺され、／私たちの咎のために碎かれたのだ。／彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、／その打ち傷のゆえに、私たちは癒やされた。

Ⅲ. 食べられる子羊 — いのちの共有

1. 出 12：8

Exo 12:8 そして、その夜、その肉を食べる。それを火で焼いて、種なしパンと苦菜を添えて食べなければならない。

(1) 焼いた子羊を食する命令。

①キリストのいのちを取り込むことの象徴

②ヨハ 6：53～54

Joh 6:53 イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。

Joh 6:54 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。

③救いは単なる免罪ではなく、新しい命の授与である。

2. 急いで食する（種なしパン）

(1) 救いは「出発」であり、歩みの始まりでもある。

①パン種＝罪を除去して歩む聖別の原理（1 コリ 5：7～8）

②十字架は「罪赦される起点」であり、「聖さへ向かう出発」。

(2) 記念として繰り返す。

①過越→聖餐式へ継承（ルカ 22：19～20）

Ⅳ. エジプトからの脱出 — 救いの結果

1. 支配の領域が変わる。

(1) エジプト＝罪・サタンの支配

①神の民として歩む生活が開始

②救いは「罪からの解放」＋「神の民としての新しい身分」

(2) 祝福の富を携え出る。

①出 12：36

Exo 12:36 【主】はエジプトがこの民に好意を持つようにされたので、エジプト人は彼らの求めを聞き入れた。こうして彼らはエジプトからはぎ取った。

②アブラハム契約成就の証拠（創 15：14）

2. 異邦人も信仰により同行

(1) 出 12 : 38

Exo 12:38 さらに、入り混じって来た多くの異国人と、羊や牛などおびただしい数の家畜も、彼らとともに上った。

①割礼＝信仰のしるし

②救いの普遍性の初期形態（ロマ 4 章）

結論：今日の信者への適用

1. 確信

(1) 子羊の血の下にある確信

(2) 私たちは、神の怒りから完全に解放されている。

(3) 救いの確信は、自己評価ではなくキリストの血によって与えられる。

2. 行動

(1) 出発した者として生きる。

(2) 出エジプトは「新しい歩みの開始」を象徴している。

(3) 信者は罪の支配下に留まる必要はない（ロマ 6 章）。

(4) 種なしパンの生活＝罪を持ち込まない歩み、継続的なへりくだり。

3. 自覚

(1) 神の民としてのアイデンティティを自覚する。

(2) 信仰と恵みによって「所有者」が変わった。

(3) サタンの権威の下にいてではなく、「神の所有」（1 ペテ 2 : 9）である。

(4) 自分は「誰に属する者なのか？」を常に確認する。

4. 使命

(1) 異邦人も信仰によって同行した（出 12 : 38）。

(2) 神は今も全世界を祝福しようとしておられる。

(3) 選びは、他者を祝福するための召命である。

(4) 神の国建設の物語を生きる人は幸いである。

創造から新天新地へー24 章でたどる神の救済史

5 章 「シナイ契約と神の民の召し」

出エジプト記 20 章

1. はじめに

(1) 1 章（創 1 章）では「世界の始まり」を取り上げた。

①天地創造の目的は、神の国の臣民を造り出すことにあった。

(2) 2 章（創 3 章）では「人類の墮落と救い主の約束」を取り上げた。

①悪魔は、悪魔の国を作ろうとしている。

②神は、救い主の約束を与えた。

(3) 3 章（創 12 章）では「アブラハムの選び」を取り上げた。

①救済史は、一人の人の選びから始まった。

②救済史は、選ばれた系譜の歴史である。

(4) 4 章（出 12 章）では「イスラエル民族の始まり」を取り上げた。

①ヤコブの子孫たちはエジプトで一大民族となり、そこを脱出した。

②旧約最大の救いの出来事は、イエスの十字架を指し示している。

(5) 5 章（出 20 章）では「シナイ契約と神の民の召し」について取り上げる。

①神はイスラエルの民とシナイ契約を結ばれる。

②律法は救いの条件ではなく、神とともに歩むための指針である。

シナイ契約の目的は、「救われた民の生き方」を教えることである。

シナイ契約の 3 つのポイントを学ぶと、いかに生きるべきかが分かる。

I. 神の自己啓示

1. 出 20：1～2

Exo 20:1 それから神は次のすべてのことばを告げられた。

Exo 20:2 「わたしは、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出したあなたの神、

【主】である。

(1) 律法は「救いの前提」ではなく「救いの結果」である。

①神はまず「解放者」としてご自身を啓示する。

②次に民に生き方を教える。

(2) 神との関係は「恵みに基づく契約」であり、律法はその枠組み。

①イスラエルに 613 の律法が与えられた。

2. 適用

(1) 私たちも恵みによって救われ、その後に「主に従う」生活へ招かれる。

①神の国の臣民になるための準備が始まる。

II. 契約の民の義務

1. 十戒（20：3～17）

(1) 十戒は二方向に整理される。

2. 第 1～第 4 戒：神への愛

(1) 神だけを礼拝する。

(2) 偶像を造らない。

(3) 【主】の名をみだりに唱えない。

(4) 安息日を守る。

3. 第 5～第 10 戒：隣人への愛

(5) 父母を敬う。

(6) 殺してはならない。

(7) 姦淫してはならない。

(8) 盗んではならない。

(9) 偽証してはならない。

(10) 貪ってはならない。

4. 適用

(1) イエスも「神を愛し、人を愛する」ことが律法全体の要約だと語られた。

①マタ 22：37～40

(2) 信仰生活は、「神への愛」「隣人への愛」という二つの方向で考えるべき。

III. シナイ契約の 3 つの意味

1. 贖われた民の「契約的アイデンティティ」を確立する。

(1) イスラエルは、単なる解放奴隷集団ではない。

①【主】の所有の民

②祭司の王国

③聖なる国民

(2) シナイ契約は、神の国の民の雛形を地上に可視化する役割を果たす。

2. 罪を啓示し、救済史を次の段階へ進める。

(1) 律法は、罪を取り除く力を持たない。

①律法は、罪を明らかにする（ロマ 3：20、7：7）。

(2) シナイ契約は、人間の限界を暴露する。

①より深い救い（新しい契約）への必要性を浮き彫りにする。

②「律法は、キリストに導く養育係でした。」（ガラ 3：24）

3. メシア到来のための「舞台装置」を整える。

(1) シナイ契約は以下の概念を可視化した。

①祭司制度—仲介者の必要性

②犠牲制度—代償的贖い

③聖所（幕屋・神殿）—礼拝の方法

④清浄・汚れの区別—罪と聖さの区別

(2) ヘブル人への手紙の教え

①これらはすべて、キリストの十字架と大祭司的働きの子型である。

(3) 新しい契約との関係

①シナイ契約：石の板、外面的規定

②新しい契約：心にかかれる律法（エレ 31：31～34）

③救済史は、外的律法 → 内的刷新へと進展する。

(4) シナイ契約は失敗したのか。

①人間は律法を守れなかった。

②しかし律法は、その役割を果たした。

* 罪を示し、救い主を待望させ、神の義の基準を明確にした。

適用：今日の信者への適用

1. すでに救われているという自覚

(1) シナイ契約は、すでに救われた民への生活の指針である。

(2) 私たちもまた、行いによってではなく、恵みによって救われている。

(3) 信仰生活は、「義務」から始まるのではなく、「解放」から始まる。

2. 神の国の市民であるという自覚

- (1) 十戒は、神の国の価値観を地上で生きるための指針である。
- (2) 私たちは、「キリストの律法」（ガラ 6：2）に従って生きる。
- (3) 聖霊によって愛の実践が可能になる。

3. キリストに望みを置いているという自覚

- (1) 律法は、私たちが義とすることはできない。
- (2) 律法が指し示していた犠牲は、十字架で完成した。
- (3) 祭司制度は、キリストの大祭司的働きによって成就した。

4. 神の救済史を生きているという自覚

- (1) 創造から始まった神のご計画は、律法を通して罪を明らかにし、キリストによって完成へと導かれ、やがて新天新地において完全に実現する。
- (2) 私たちは、その救済史の只中に生きる「神の民」として、恵みによって救われ、愛によって生きる者として歩んでいく。

創造から新天新地へー24 章でたどる神の救済史

6 章 「奴隷生活から定住生活へ」

ヨシュア記 1 章

1. はじめに

(1) 創 1 章、3 章、12 章、出 12 章、20 章を取り上げてきた。

- ①創造
- ②墮落
- ③アブラハム 契約
- ④出エジプト
- ⑤ 荒野での律法付与

(2) ヨシ 1 章

- ①荒野の 40 年は、贖われた民が「信仰を学ぶ学校」であった。
- ②荒野は神の声を聞く場所である。
- ③しかし、最終目的地ではない。
- ④神の約束が現実となる時が来る。
- ⑤その入口に置かれているのが、ヨシュア記 1 章である。

(3) ヨシュア記の特徴

- ①救済史の新たな進展を告げる書である。
- ②戦略を教える書である（神の導きによる戦いの原則）。
- ③今日の信者への教訓を多く含んだ書である。

神の物語を生きる者は、ヨシュア記 1 章から教訓を学ぶことができる。

神がヨシュアに語ったことばを分割すれば、4 つの教訓を学ぶことができる。

I. モーセは死んだが、神の計画は進む。

1. 1～2 節

Jos 1:1 【主】のしもべモーセの死後、【主】はモーセの従者、ヌンの子ヨシュアに告げられた。

Jos 1:2 「わたしのしもべモーセは死んだ。今、あなたとこの民はみな、立ってこのヨルダン川を渡り、わたしがイスラエルの子らに与えようとしている地に行け。

2. モーセは死んだ。

- (1) これは、非常に重い現実である。
- (2) イスラエルにとって、モーセは単なる指導者ではなかった。

- ①出エジプトを導いた人
- ②神と顔と顔を合わせた人
- ③海を分けた人
- ④彼を通して律法が与えられた人

3. しかし、神の計画に遅延はない。

- (1) 人は去っても、神は語り続けられる。
- (2) 神は「さあ、今、立ち上がり、このヨルダン川を渡れ」と命じた。
- (3) 神は常に次の一步を示される方である。

4. 適用

- (1) 神の働きは、偉大な人物によって支えられているのではない。
- (2) 神ご自身が主役である。
- (3) 教会も同じである。
- (4) 時代が変わり、指導者が変わっても、神の救済史は止まらない。
- (5) 過去がどうであったかではなく、今がどうであるかが問題である。

II. 約束は与えられているが、踏み出す必要がある。

1. 3～4節

Jos 1:3 わたしがモーセに約束したとおり、あなたがたが足の裏で踏む場所はことごとく、すでにあなたがたに与えている。

Jos 1:4 あなたがたの領土は荒野からあのレバノン、そしてあの大河ユーフラテス川まで、ヒッタイト人の全土、日の入る方の大海までとなる。

2. 約束はすでに「与えられている」。

- (1) 「与えた」という表現は、完了形である。
- (2) 神の側では、すでに決定済みである。
- (3) しかし、経験的所有には行動が必要である。
- (4) 立っているだけでは、地は自分のものにならない。

3. 救済史的理解が必要である。

- (1) 出エジプト：救われた
- (2) 荒野：訓練された
- (3) 約束の地：相続する
- (4) 約束の地は、イスラエルの民が神の栄光を表すための舞台となる。
- (5) 私たちも同じである。

(6) 救われたことと、勝利の歩みを生きることが、同一ではない。

III. 恐れはあるが、それを乗り越える方法がある。

1. 5～6節

Jos 1:5 あなたの一生の間、だれ一人としてあなたの前に立ちはだかる者はいない。わたしはモーセとともにいたように、あなたとともにいる。わたしはあなたを見放さず、あなたを見捨てない。

Jos 1:6 強くあれ。雄々しくあれ。あなたはわたしが父祖たちに与えると誓った地を、この民に受け継がせなければならないからだ。

2. ヨシュアが恐れなかったはずがない。

(1) 強固な城壁、武装した敵、未経験の戦い

3. しかし、神は「わたしがあなたとともにいる」と言われた。

(1) 勇気の根拠は、自信でも、経験でも、能力でもない。

(2) 「主の臨在」である。

(3) 「強く、雄々しくあれ」とは、性格命令ではなく、「信仰命令」である。

(4) 主の臨在を信頼せよという信仰命令である。

IV. 戦略書ではなく、みことばが与えられた。

1. 7～8節

Jos 1:7 ただ強くあれ。雄々しくあれ。わたしのしもべモーセがあなたに命じた律法のすべてを守り行うためである。これを離れて、右にも左にもそれてはならない。あなたが行くところどこでも、あなたが栄えるためである。

Jos 1:8 このみおしえの書をあなたの口から離さず、昼も夜もそれを口ずさめ。そのうちに記されていることすべてを守り行うためである。そのとき、あなたは自分がすることで繁栄し、そのとき、あなたは栄えるからである。

2. 勝利の鍵は「みことばに従うこと」である。

(1) みことばは、神のご性質を示すからである。

(2) 神の道に歩む者は、神の守りの中にある。

(3) 「成功」とは、世的な達成ではない。

(4) 神の目的と一致した人生こそ、聖書的成功である。

3. みことばから離れるとどうなるか。

(1) 預言者たちの出現

- (2) アッシリア捕囚
- (3) バビロン捕囚
- (4) メシアの到来とメシア的王国（千年王国）の預言

結論：今日の信者への適用

1. 信仰は「過去の回顧」ではなく「神とともに前進すること」。
 - (1) 神は、「過去を惜しむのではなく、今、立ち上がれ」と語っておられる。
 - (2) 信仰とは、今、神が語っておられる声に従うことである。
2. 荒野は定住の地ではない。
 - (1) 出エジプト＝救い
 - (2) 荒野＝訓練
 - (3) 約束の地＝相続
 - (4) 神の約束は、信仰によって踏み出すことで初めて現実となる。
3. 恐れがあること自体は、罪ではない。
 - (1) ヨシュアは恐れなかったのではない。
 - (2) 神は3度も「強くあれ。雄々しくあれ」と語られた。
 - (3) 信仰者も恐れる。
 - (4) 将来、健康、教会の行く末、社会の変化
 - (5) 恐れを克服する方法は、「主がともにおられる」という約束に立つこと。
4. 信仰生活の成功基準を、聖書的に再定義する。
 - (1) 世は、数、規模、効率、成果を成功と呼ぶ。
 - (2) しかし、神はヨシュアに戦術書、政治書、組織論を与えなかった。
 - (3) 神は「みことば」を与えた。
 - (4) みことばこそが神の御心を示すからである。
 - (5) みことばに従う者は、神の守りの中にあるからである。
5. 「定住生活」とは、安定ではなく使命の始まりである
 - (1) 約束の地は、神の栄光を表す舞台であり、霊的戦いの現場である。
 - (2) 教会の存在目的は、神の栄光を現すために生きることである。
 - (3) 新天新地に至るまで、神の民は「使命を帯びた民」である。

創造から新天新地へー24 章でたどる神の救済史

7 章 「ダビデ契約とメシアの希望」

サムエル記第二 7 章

1. はじめに

(1) これまでの流れ

- ①創造
- ②墮落
- ③アブラハム 契約
- ④出エジプト
- ⑤ 荒野での律法付与

(2) 前はヨシ 1 章を取り上げた。

- ①荒野の 40 年は、贖われた民が「信仰を学ぶ学校」であった。
- ②荒野は神の声を聞く場所であるが、最終目的地ではない。
- ③ヨシュア記は、救済史の新たな進展を告げる書である。

(3) 今回はサムエル記第二 7 章を取り上げる。

- ①ヨシュアの時代→士師たちの時代→王国の時代
- ②王国時代の頂点に立つのがダビデである。
- ③ダビデはイスラエルを統一し、エルサレムを首都とした。
- ④神殿を建てたいと願ったが、神は、その子ソロモンが神殿を建てると告げた。
- ⑤その代わりに神は、ダビデとその子孫に「永遠の王国」を約束された。
- ⑥「ダビデ契約」は、アブラハム契約の「子孫の約束」を詳細に定義した。

ダビデ契約はメシアの初臨と再臨を約束している。

契約締結の経緯、7つの条項、メシア預言を確認すればそのことが分かるようになる。

I. 契約締結の経緯

1. 人の願いから神の約束へ

(1) ダビデは、神のために家（神殿）を建てたいと願った。

- ①自分は杉材の家に住んでいる。
- ②神の箱は天幕（幕屋ではなくテント）の中に宿っている。

(2) 預言者ナタンは、それに同意した。

- ①彼は、御心を求めないで即答した。
- ②後に、【主】からの啓示があった。

2. 神の啓示

(1) 5～7 節

2Sa 7:5 「行って、わたしのしもべダビデに言え。『【主】はこう言われる。あなたがわたしのために、わたしの住む家を建てようというのか。

2Sa 7:6 わたしは、エジプトからイスラエルの子らを連れ上った日から今日まで、家に住んだことはなく、天幕、幕屋にいて、歩んできたのだ。

2Sa 7:7 わたしがイスラエルの子らのすべてと歩んだところどこでも、わたしが、わたしの民イスラエルを牧せよと命じたイスラエル部族の一つにでも、「なぜ、あなたがたはわたしのために杉材の家を建てなかったのか」と、一度でも言ったことがあったらうか。』

(2) 神は逆に、「あなたのために家を建てる」と宣言された。

①信仰深い動機であっても、神の計画が優先される。

(3) ダビデ契約によって、救済史は大きく動く。

①アブラハム契約と同様、恵みに基づく一方的契約である。

②罪に対する裁きはあるが、契約が破棄されることはない。

③それゆえ、ダビデ契約は今も有効である。

II. 7つの条項

1. とこしえの王朝が約束された。

(1) 16 節

2Sa 7:16 あなたの家とあなたの王国は、あなたの前にとこしえまでも確かなものとなり、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ。』

①ダビデの家（王朝）は、永遠に続く。

②今も、ダビデの家に属する人がどこかに必ず存在している。

2. ダビデの息子のひとり（ソロモン）が、ダビデの後に王座を確立する。

(1) 12 節

2Sa 7:12 あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。

①アブシャロムとアドニヤが王座を奪おうとする。

②しかし、ダビデの王座を確立するのはソロモンである。

3. ソロモンは神殿を建てる。

(1) 13 節

2Sa 7:13 彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をどこしえまでも堅く立てる。

- ①ダビデが神殿を建てることは許可されなかった。
- ②ダビデは戦士であり、あまりにも多くの人の血を流した。
- ③神殿建設の仕事は、息子ソロモンの手に委ねられた。

4. ダビデ王国の王座は永遠に堅く立つ。

(1) 16 節

2Sa 7:16 あなたの家とあなたの王国は、あなたの前にとこしえまでも確かなものとなり、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ。』

- ①永遠に堅く立つと約束されているのは、ソロモン自身ではない。
- ②王座が永遠に立つということである。

5. ソロモンは罪のゆえに懲らしめを受けるが、恵みが取り去られることはない。

(1) 14～15 節

2Sa 7:14 わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。彼が不義を行ったときは、わたしは人の杖、人の子のむちをもって彼を懲らしめる。

2Sa 7:15 しかしわたしの恵みは、わたしが、あなたの前から取り除いたサウルからそれを取り去ったように、彼から取り去られることはない。

- ①かつて神は、不従順のゆえにサウル王から恵みを取り去った。
- ②ソロモンの場合、懲らしめを受けても、恵みが取り去られることはない。
- ③彼は偶像礼拝の罪を犯したが、王国が取り去られることはなかった。
- ④ソロモンは、無条件契約の下にいた。これが、サウルとの違いである。

6. メシアは、「ダビデの子孫」から生まれる。

(1) 1 歴 17：11

1Ch 17:11 あなたの日数が満ち、あなたが先祖のもとに行くとき、わたしはあなたの息子の中から、あなたの後に世継ぎの子を起し、彼の王国を確立させる。

- ①2サム 7 章は、ソロモンに重点を置いた預言である。
- ②1 歴 17 章は、メシアに重点を置いた預言である。
- ③この約束を成就するのは、「ダビデの子孫」として生まれる方である。

7. メシアとその王座、家、王国はとこしえに堅く立つ。

(1) 1 歴 17：14

1Ch 17:14 わたしは、わたしの家とわたしの王国の中に、彼をとこしえまでも立たせる。
彼の王座はとこしえまでも堅く立つ。』』

- ①王座だけでなく、ダビデの王座に着く「お方ご自身」もとこしえに立つ。
- ②この約束は、メシアに関するものです。
- ③歴代誌第一 17 章は、王座に着く者が罪を犯す可能性に言及していない。

III. メシアの希望

1. 要約すると、神は永遠に続く 4 つのことをダビデに約束された。

- ①「とこしえの家（王朝）」
- ②「とこしえの王座」
- ③「とこしえの王国」
- ④「とこしえの子孫」

2. ダビデの子孫は、「神であり人であるメシア」でその系譜が完結する。

- (1) それゆえ、ダビデの家、王座、王国は永遠に続くことが保証される。

3. 預言的展開：預言者たちのメシア理解

- (1) イザヤ：ダビデの切り株から出る若枝
- (2) エレミヤ：正義を行うダビデの若枝
- (3) エゼキエル：一人の牧者ダビデ

4. 究極的成就：イエス・キリスト

- (1) ダビデの子として誕生
- (2) 初臨＝神の国の提示
- (3) 再臨＝地上的王国（千年王国）の完成

結論：今日の信者への適用

1. 「人の善意」よりも「神のご計画」を信頼する信仰へ。

- (1) ダビデの願いは、極めて信仰深いものであった。
- (2) しかし神は、その願いを拒否した。
- (3) 神の御心は、「救済史全体の計画」に基づいて進められる。

2. 不完全な信者を用い続ける神の恵みに生きる。

- (1) ダビデ契約は無条件契約である。
- (2) ソロモンが罪を犯すと懲らしめはあるが、恵みが取り去られることはない。
- (3) 私たちは、失敗しても神の恵みに立ち返るよう招かれている。

3. 目に見える現実ではなく、「とこしえの王座」に希望を置く。
 - (1) ダビデ王国は、歴史的にはやがて崩壊する。
 - (2) 王座そのものはとこしえに立つ。
 - (3) その約束は、メシアにおいて成就する。
 - (4) 「今、見える状況」ではなく「約束されている王国」に希望を置いて生きる。

4. 初臨と再臨の間を生きる者としての使命を自覚する。
 - (1) 初臨のメシアは、神の国を提示された。
 - (2) 再臨のメシアは、ダビデ契約を完全に成就される。
 - (3) 私たちは、「すでに」と「まだ」の間に生きている。
 - (4) 私たちは、完成を待ち望む希望の証人として生きるよう召されている。

創造から新天新地へ—24 章でたどる神の救済史

8 章 「王国崩壊の理由」

列王記第二 25 章

1. はじめに

(1) これまでの流れ

- ①創造
- ②墮落
- ③アブラハム 契約
- ④出エジプト
- ⑤ 荒野での律法付与
- ⑥約束の地の征服

(2) 前はサムエル記第二 7 章を取り上げた。

- ①ヨシュアの時代→士師たちの時代→王国の時代
- ②王国時代の頂点に立つのがダビデである。
- ③神は、ダビデとその子孫に「永遠の王国」を約束された。
- ④「ダビデ契約」は、アブラハム契約の「子孫の約束」を詳細に定義した。

(3) 今回は列王記第二 25 章を取り上げる。

- ①王国の崩壊は、偶発的な軍事的敗北ではない。
- ②2 列 25 章は、長い霊的墮落の必然的帰結である。
- ③歴史的出来事の背後には霊的理由がある。

王国崩壊の先に希望が残されている。

崩壊の原因と結果を学べばそれが分かる。

I. 直接的原因：バビロン捕囚という歴史的事実（1～7 節）

1. エルサレム陥落

(1) 包囲（1 節）

2Ki 25:1 ゼデキヤの治世の第九年、第十の月の十日に、バビロンの王ネブカドネツアルは、その全軍勢を率いてエルサレムを攻めに来て、これに対して陣を敷き、周囲に塁を築いた。

(2) 飢饉（3 節）

2Ki 25:3 第四の月の九日、都の中で食糧難がひどくなり、民衆に食物がなくなった。

(3) 逃亡と捕縛（4～7 節）

2Ki 25:4 そのとき、都は破られ、戦士たちはみな夜のうちに、王の園に近い二重の城壁の間にある、門の道から出て行った。カルデア人が都を包囲していたので、王はアラバへの道を進んだ。

2Ki 25:5 カルデアの軍勢は王の後を追ひ、エリコの草原で彼に追いついた。すると、王の軍隊はみな王から離れて散ってしまった。

2Ki 25:6 カルデアの軍勢は王を捕らえ、リブラにいるバビロンの王のところに彼を連れ上り、彼に宣告を下した。

2Ki 25:7 彼らはゼデキヤの息子たちを彼の目の前で虐殺した。王はゼデキヤの目をつぶし、青銅の足かせをはめて、バビロンへ連れて行った。

(4) ゼデキヤ王の運命

①息子たちの殺害

* 反逆の可能性が摘み取られた。

②目をつぶされ、青銅の足かせをはめられた。

* 王国の「目」が失われたことを象徴している。

③バビロンへ連行

2. 宗教的中心の崩壊：神殿の破壊（8～17 節）

(1) 神殿・王宮・家屋の焼失

①祭具の略奪と破壊

(2) ここで問うべきこと

①イスラエルの神は敗北したのか。

②異教の神が勝ったのか。

③答え：神ご自身が神殿を去られた後の裁きである。

II. 霊的原因

1. 契約違反 — シナイ契約の破棄

(1) 申命記 28 章の祝福と呪い

①イスラエルの民は、祝福か呪いかを選ぶ責任があった。

②律法に従うことは、祝福を得る道である。

(2) 列王記は一貫してこの枠組みで歴史を評価している。

①列王記はヘブル語聖書の区分によると「初期預言者」に含まれる。

(3) 特に問題とされた罪

- ① 偶像礼拝
- ② 高き所の放置
- ③ 不正と流血
- ④ 悔い改めの拒否

(4) 25 章は「呪い条項の成就」である。

2. 王の失敗 — ダビデ契約の誤解

(1) 「ダビデの家は守られる」という誤った安心感

(2) 王たちの思い違い

- ① 契約は無条件
- ② 行いは問われない。

(3) 聖書のバランス

- ① モーセ契約：国の存続は従順次第である。
 - * カナンの地は信仰を試す地である。
- ② ダビデ契約：王統は保たれる。
 - * 無条件契約である。
- ③ 王国は滅びたが、王統は断絶していない。
 - * その王統からメシアが誕生する。

3. 民の失敗—預言者の声を拒絶

(1) 預言者は繰り返し警告していた。

- ① 申命記の原則への回帰を命じた。
- ② それでも民と王は聞かなかった。

(2) 列王記の神学

- ① 預言者のことば = 神のことば
- ② 25 章は「聞かなかった結果の記録」である。

III. 絶望の中の光（27～30 節）

1. エホヤキンの解放

2Ki 25:27 ユダの王エホヤキンが捕らえ移されて三十七年目の第十二の月の二十七日、バビロンの王エビル・メロダクは、王となったその年のうちにユダの王エホヤキンを牢獄から呼び戻し、

2Ki 25:28 優しいことばをかけ、バビロンで彼とともにいた王たちの位よりも、彼の位を高くした。

2Ki 25:29 彼は囚人の服を脱ぎ、その一生の間、いつも王の前で食事をした。

2Ki 25:30 彼の生活費はその日々の分を、一生の間、いつも王から支給されていた。

(1) 王としての尊厳の回復

2. 意味

(1) ダビデ王統は生きている

(2) 神の約束は破棄されていない

①神の力不足ではない。

②契約の民が、契約の神に背いた。

③しかし同時に、神は約束を完全には終わらせていない。

結論：今日の信者への適用

1. 霊的崩壊は、ある日突然起こるのではない。

(1) ユダの滅亡は、長年にわたる反逆の積み重ねが原因であった。

①妥協

②聞き流し

③悔い改めの先延ばし

(2) 大きな罪よりも小さな不従順の放置が、霊的感觉を鈍らせる。

2. 「神殿がある」という安心感は、危険である

(1) 信仰の「形」は、神との関係を保証しない。

①ユダには神殿、祭司、祭儀があった。

②それでも滅びた。

(2) 外的行為は神との関係を保証しない。

①教会に通っている、聖書を持っている、奉仕をしている。

②それ自体が、神に聞き従っている証拠にはならない。

3. 恵みを、放縦の理由にしてはならない。

(1) 王たちは「ダビデの家は守られる」という真理を曲解した。

①だから何をしてもよいと考えた。

(2) 恵みの下にいるから問題ないというのは、聖書的な恵み理解ではない。

4. 希望の光は残されている。

(1) 列王記の最後は、勝利でも復興でもなく、「回復の兆し」で終わる。

①これは、信者への大きな励ましである。

(2) 神は、必ず「次の物語」を備えておられる。

①地上の王国は崩れるが、神の王国は崩れない。

②だからこそ、真の王、真の神殿、真の国が待望されるようになった。

③私たちの希望は、やがて来る神の完全な支配にある。

創造から新天新地へー24 章でたどる神の救済史

9 章 「受難のしもべの預言」

イザヤ書 53 章

1. はじめに

(1) これまでの流れ

- ①創造（創 1 章）
- ②墮落（創 3 章）
- ③アブラハム 契約（創 12 章）
- ④出エジプト（出 12 章）
- ⑤ 荒野での律法付与（出 20 章）
- ⑥約束の地の征服（ヨシ 1 章）
- ⑦ダビデ契約（2 サム 7 章）

(2) 前回は列王記第二 25 章を取り上げた。

- ①王国の崩壊は、偶発的な軍事的敗北ではない。
- ②2 列 25 章は、長い霊的墮落の必然的帰結である。
- ③歴史的出来事の背後には霊的理由がある。

(3) 今回は、イザヤ書 53 章を取り上げる。

- ①イザヤ 42 章、49 章、50 章、53 章に現れる 4 つの「しもべの歌」
- ②53 章は、その頂点かつ完成形である
- ③「王なるメシア」と「受難のしもべ」という二重のメシア像
 - *ダビデ契約に基づく王的メシア像
 - *イザヤ 53 章に示される苦難のメシア
- ④旧約時代には、この二つが統合されずに並存していた。

(4) 救済史におけるイザヤ 53 章の位置づけ

- ①王国崩壊後に示された「希望の中心」
- ②政治的回復ではなく、霊的回復が先行する。

初臨のメシアは「受難のしもべ」として来られる。

イザヤ 53 章の構造を確認すると、それが分かる。

I. 受難のしもべの姿（53：1～9）

1. 1～3 節

Isa 53:1 私たちが聞いたことを、だれが信じたか。／【主】の御腕はだれに現れたか。

Isa 53:2 彼は主の前に、ひこばえのように生え出た。／砂漠の地から出た根のように。／
彼には見るべき姿も輝きもなく、／私たちが慕うような見栄えもない。

Isa 53:3 彼は蔑まれ、人々からのけ者にされ、／悲しみの人で、病を知っていた。／人が
顔を背けるほど蔑まれ、／私たちも彼を尊ばなかった。

(1) 人々から拒絶されるしもべ

- ①「見るべき姿も輝きもない」
- ②宗教的・社会的期待からの完全な逸脱

(2) 身代わりとしての苦難

- ①「彼が負ったのは、私たちの病」（4節）
- ②苦難の原因が本人ではなく「私たち」にあること

(3) 沈黙するしもべ

- ①裁き場で自己弁護をしない（7節）。
- ②神の御心への完全な従順

II. 代償的贖いという核心

1. 4～6節

Isa 53:4 まことに、彼は私たちの病を負い、／私たちの痛みを担った。／それなのに、私
たちは思った。／神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだと。

Isa 53:5 しかし、彼は私たちの背きのために刺され、／私たちの咎のために砕かれたの
だ。／彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、／その打ち傷のゆえに、私たちは癒や
された。

Isa 53:6 私たちはみな、羊のようにさまよい、／それぞれ自分勝手な道に向かって行っ
た。／しかし、【主】は私たちすべての者の咎を／彼に負わせた。

(1) 「私たちのために」という繰り返し

- ①贖いの主体は神
- ②対象は罪ある人間

(2) 旧約における代償概念の完成

- ①犠牲制度（レビ記）との連続性
- ②動物のいけにえでは到達できなかった最終的贖い

III. 神の主権と救済計画

1. 10節

Isa 53:10 しかし、彼を砕いて病を負わせることは／【主】のみこころであった。／彼が自分のいのちを／代償のささげ物とするなら、／未長く子孫を見ることができ、／【主】のみこころは彼によって成し遂げられる。

(1) 「【主】のみこころであった」の意味

- ①偶発的悲劇ではない
- ②神の計画の中にある受難

(2) 苦難を通して実現する神の目的

- ①罪の赦し
- ②義といのちの付与

(3) 福音書の記者たちによる十字架刑の描写

- ①苦しみの大きさではなく、苦しみに意味に焦点を合わせている。

IV. 義とされる民の誕生

1. 11～12 節

Isa 53:11 「彼は自分のたましいの／激しい苦しみのあとを見て、満足する。／わたしの正しいしもべは、／その知識によって多くの人を義とし、／彼らの咎を負う。

Isa 53:12 それゆえ、／わたしは多くの人を彼に分け与え、／彼は強者たちを戦勝品として分かち取る。／彼が自分のいのちを死に明け渡し、／背いた者たちとともに数えられたからである。／彼は多くの人の罪を負い、／背いた者たちのために、とりなしをする。」

(1) 「多くの者を義とする」という宣言

- ①行いではなく、しもべの働きによる義
- ②後の新しい契約への布石

(2) 勝利者としてのしもべ

- ①分捕り物を分ける王のイメージ
- ②受難の果てにある栄光

結論：今日の信者への適用

I. 私たちは「受難のしもべによって生かされている民」であることを認識する。

(1) 救いは、人間の努力によってではなく、神の側の犠牲によって成し遂げられた。

(2) 「自分がどれほど頑張っているか」ではなく、「どれほど大きな代価がすでに支払われたか」を覚えて生きるべきである。

(3) 信仰の土台は、「彼は私たちの背きのために刺された」という事実にある。

2. クリスチャンは「栄光に先立つ低さ」を通ることを自覚する。
 - (1) 受難のしもべは、拒絶され、誤解され、沈黙を強いられた。
 - (2) それは、神に見捨てられたからではなく、御心のただ中にあったから。
 - (3) 私たちも同じような道を通過する。
 - (4) 「低さ」は失敗のしるしではなく、神が働かれる通路である。
3. 苦しみを「神の手の中のもの」として受け止める。
 - (1) 苦難は、偶然でも無意味でもない。
 - (2) 理由がすぐに分からなくても、「神の主権の外にあるものではない」と信じる。
 - (3) 私たちの信仰は、苦しみの中で神を見失わない信仰である。
4. 「義とされた者」として生きる責任を自覚する。
 - (1) イザヤ 53 章は、「多くの者を義とする」という驚くべき宣言で終わる。
 - (2) 私たちは、法的に、決定的に義とされた存在である。
 - (3) 義とされるために生きるのではなく、義とされた者として生きる。
 - (4) 罪の赦しは免罪符ではなく、新しい歩みへの召命である。
 - (5) 私たちは、再臨のメシアが来られるのを待ちながら歩む民である。